校長室に『子どもに聞かせるえらい人の話』という本が置いてあります。図書館の廃棄本の中に混じっていたこの本の題名を見た時に、捨てられてしまうのは「えらいこっちゃ！」と、引き抜いておいたものです。一九六五年、実業之日本社刊。この本の「ひろい心　社会につくした人の話」の中にストウ夫人の話が出ていました。そうです。あの『アンクル・トムの小屋』の作者、ストウ夫人です。

ストウ夫人は、自分の家で働くことになった黒人の女子の身の上話から物語を思いつき、仕事の合間を見て『アンクル・トムの小屋』を書いたのだそうです。解説の部分には「ストウ夫人（一八一一～九六）は、六人の子どもを育てながら、この小説を書きました。この本の中には、キリスト教の正義と博愛の精神が、強く流れています。」と、ありました。

さて、コネティカット州のストウ夫人の家のお隣に、ある有名な人が住んでおりました。ミシシッピ川の水先案内人（当時の平均年収を超える高給を得ることのできる、免許の必要な職業だったそうです。）を務めたこともあり、その水先案内人が使っていた「船を航行するのに、これ以上浅瀬を行くと危険だ。」と知らせるかけ声をペン・ネームにしたというこのお方、そうです、マーク・トウェインさんです。ある日、ストウ夫人の家を訪ねたマーク・トウェインさん。三十分ほど話しこんで家に戻ってくると、奥さんに「あの方の所に、ネクタイもつけずにいらしたんですのね！」と、叱られてしまいます。

しばらくすると、ストウ夫人の家にトウェインさんの使いの者が何やら持ってやって来ました。使いの者の手紙には「先ほどはネクタイをつけずに参上して失礼いたしました。その時欠けていたものを持たせます。じっとご覧になって、三十分ほどしたらお返しください。」とあったとか…。『トム・ソーヤーの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』『王子とこじき』など、数々の小説を残したトウェインさん、とても愉快な人だったようですね。マーク・トウェインさんは「名言」もたくさん残しています。一番有名なのは「事実は小説より奇なり」ではないでしょうか。

「全てが間違っているということはあり得ない。どんな壊れた時計でも一日に二回は正しい時刻を示す」とか、「人生には二回だけ投資してはいけない時期がある。一つはその余裕がないとき。一つはその余裕があるとき」などという「名言」もあり、ユーモアの中にキラリと光るセンスを感じます。「ユーモア」という言葉で思い出したことがあります。

ＮＨＫがある俳優に密着して芸と素顔を特集したことがあり、この番組で俳優さんは三回、「作者のイズがどこにあるのか分からないのですが…」とおっしゃったのだそうです。

後日、有識者で構成するＮＨＫの用語審議会で、視聴者が「意図」を「イズ」と読むものだと勘違いすればゆゆしきことである。テロップで「イズはイトのことです。」と流すべきだと主張する委員、テロップを流せば俳優がかわいそうだと主張する委員と、意見が分かれ、会議が紛糾。そのとき国文学者の池田彌三郎委員長が、「まあ、皆さん。いいじゃないですか、イト・イズ・ミステークということで…」。会議のとげとげしい雰囲気はその一言でなごみ、委員には笑顔が。結局テロップは流さないことで決着したのだとか。

評論家の草柳大蔵氏の本に出ていたエピソードです。ユーモアは人を救う。笑顔は人を生かすのですね。

立教学院の小・中・高では、教職員全員、ハラスメント研修を受けることが義務付けられています。二回目の講座は、「心理的安全性を意識して、成果を出せるチームをつくろう」というテーマでしたが、「笑顔」もキイワードのひとつになっていました。そう言えば、マーク・トウェインさんの名言にも「人類は一つのとても効果的な武器を持っている。それは笑いだ」とありましたっけ。明日十一月三十日は、マーク・トウェインさんの誕生日。

（立教小学校校長　田代　正行）